

人として育つ、保育者の質を考える

鹿 渡 よしみ
後 藤 永 子

愛知東邦大学

人として育つ、保育者の質を考える

鹿 渡 よしみ
後 藤 永 子

目次

- 1 はじめに
- 2 研究目的
- 3 研究方法と調査内容
- 4 結果
- 5 考察
- 6 おわりに

1. はじめに

保育所保育指針の目指すところは、児童福祉の理念に基づいた保育の質の向上に尽きる。保育所で働く保育士は、子どもの最善の利益を守り、子どもたちを心身共に健やかに育てる責任を持っている。保育所には、生後8週間から就学前までの乳幼児がいる。「人」は生理的早産で生まれ、生後1年を経過し、歩き話し始める。「人」が生理的早産で生まれてくるのは、大脳の発達に他の哺乳動物に比べ顕著であるため、他の哺乳動物と同程度の発育状態に達してから出産したのでは頭部が大きくなり過ぎ出産が困難になると考えられている。子宮内という比較的均一な環境から、生理的早産という形で生まれ、刺激に満ちた環境のなかで、「人」は社会的環境の影響にさらされることになる。保育士は、生後8週間目の乳児から関わり、生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごすことになる。まさに、「人に育てる」関わりをする。子どもの未来を見据えて、長期的視野を持って、生涯に亘る生きる力の基礎を培う仕事と言える。

2. 研究目的

現在、職業として認められる仕事が30,000種類ほどあるとされている。この膨大な数の職業から保育職を選び、保育者を目指して保育養成校に入学してきた彼らが、その根底にある意識と職業選択という青年期における大きな転機に、自分の思い描いていた保育職の認識と現実とのギャップが有るとすれば、彼らは日々何を思いどのように成長してゆくのであろうか。

保育は、一人ひとりの子どもの人生のスタートに寄り添い、生きる力を培うことを援助する営みである。専門職の1つとして社会的役割を果たすために、人として育てることの重要性と、

「人間の人間による人間の教育」のスタート時点に関わる保育者としての質の問題をベースに、いかに学生のモチベーションを保ち、導き育ててゆくことが出来るか養成校教員としての考察を試みる。

3. 研究方法と調査内容

- (1) 調査対象：保育養成校の学生（4年生大学の1・2年生）
- (2) 調査方法：質問紙法
- (3) 調査時期；2013年7月22～23日
- (4) 調査内容：保育者を目指す学生の意識調査

4. 質問項目とその結果（グラフは86人を100%で表した）

総計90人の回答者のところ、学年と性別を問う設問で、2年生で4人の記入漏れがでた。そこで有効回答者としては86人を100%として計算した。

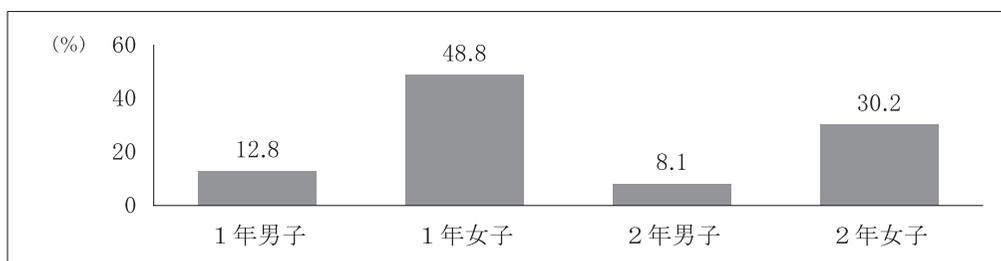


図1. 回答者の構成比率

図1から1学年、2学年共に男女比はおおよそ1対4であった。

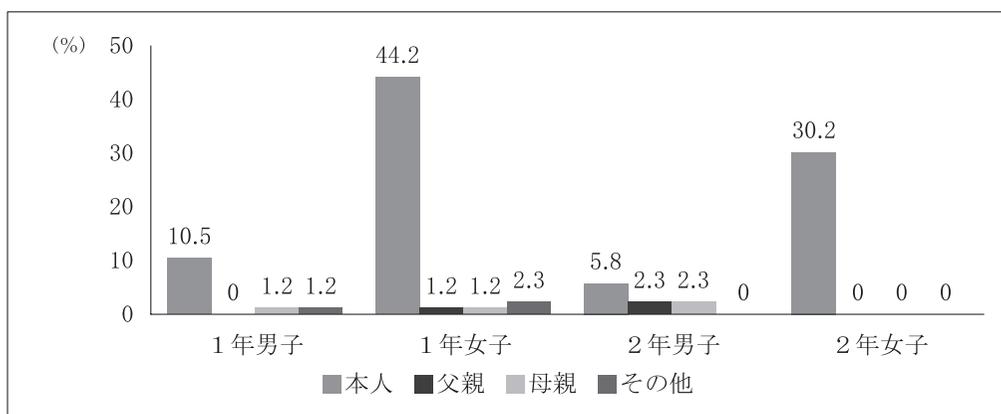


図2. 養成校に入学を希望したのは誰か

図2から、保育の養成校に入学することを強く希望したのは誰であったかの設問では、1年生53人中47人（88.7%）で、約9割の学生が自らの希望により入学している。2年生も、やはり9割以上が自らの希望で入学している。

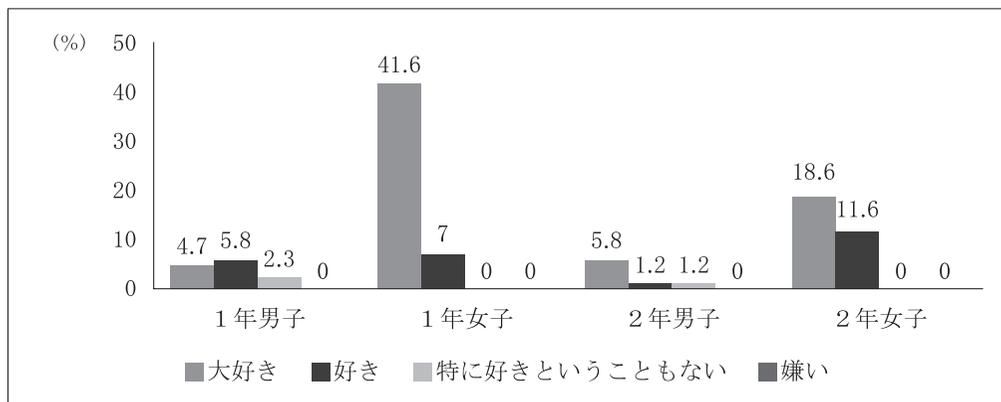


図3. 子どもは好きか

子どもは好きかという設問では、約97%が「大好き」または「好き」と答えている。「特に好きということも無い」が1、2年生の男子で3.5%あった。

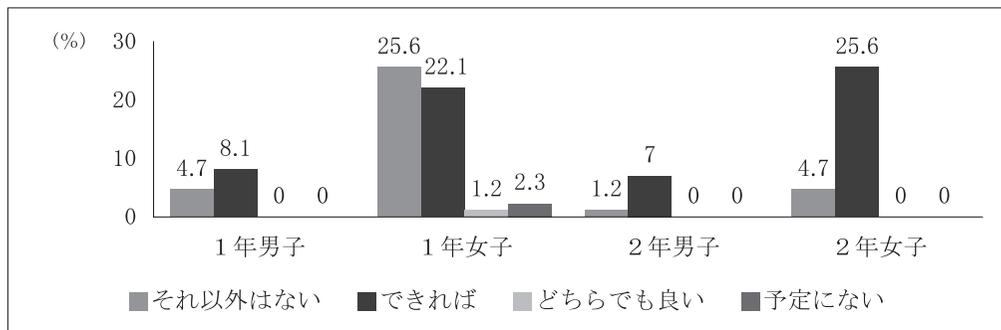


図4. 将来、保育者になる予定があるか

図4から、将来、保育者になる予定があるかという設問では「それ以外はない」と答えたのが1年生は男女合わせて30.3%、「できれば」が30.2%である。2年生になると「それ以外はない」が5.8%に、「できれば」が32.6%へと激減していた。

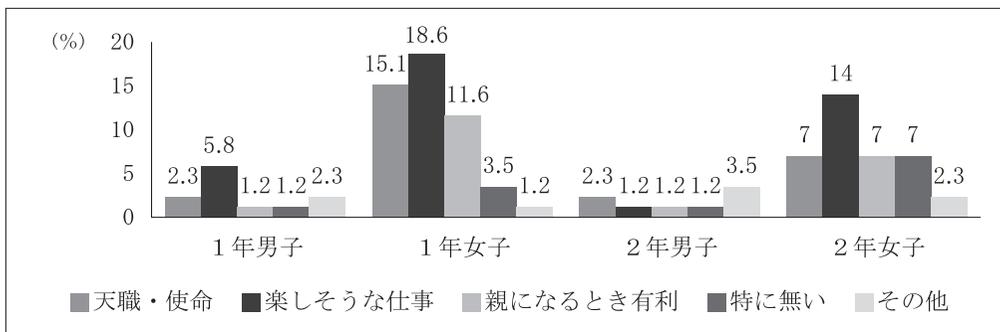


図5. 保育者になることの意味

保育者になることは、自分にとって、どんな意味があるかという設問では、「使命・天職」と答えたのが1年生では17.2%、2年生では9.3%であった。「楽しそうな仕事」と答えたのが1年生では24.4%、2年生では15.2%であった。

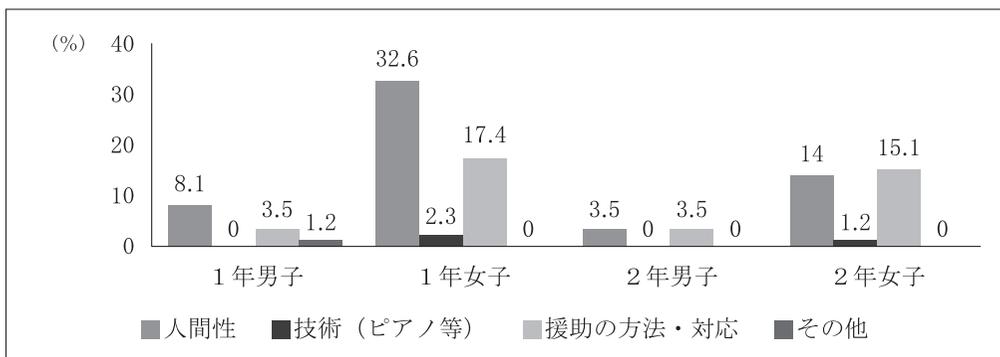


図6. 保育者として最も大切な事は何か

保育者として最も大切な事は何かという間に、全体の58.2%が「人間性」を最も大切な事として、次いで39.5%の学生が「援助の方法・対応」が大切と答えている。

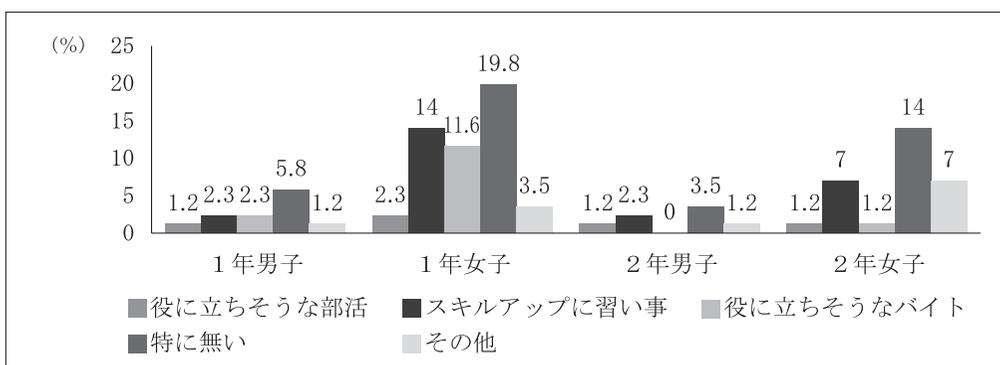


図7. 保育者となるための準備

保育者となるために何か準備をしているかという設問では、「役に立ちそうな部活」では、1年生の3.5%、2年生の2.4%がしていると答えた。「スキルアップに習い事」では、1年生の16.3%、2年生の9.3%がピアノ等の習い事をしてしたが、「特にない」が非常に多く見られた。



図8. 保育者という仕事とは

図8の保育者という仕事についての設問では、「未来を担う人を育てる」ことと、全体の87.2%が答えていた。

5. 考察

保育養成校に入学してくる学生の男女比は、今回のアンケート調査ではおよそ1対4であった。筆者が学生の頃の保育者は「保母」と呼ばれ、そのほぼ100%が女性であり「保育は女性の仕事」という考えが浸透していた。時代により、子育てに対する概念や個人の適性に対する考え方が大きく変化してきたのであろう。男性保育士の割合（人数）は確かに増加してはいるが、それでも全体的に見ればまだまだ少なく、2011年現在では保育士全体の「約4～5%」が男性保育士という現状である。

平成11年（1999年）4月の児童福祉法の改正によって（平成15年に施行）、従来までは「保母」と呼ばれていたものが、男女とも「保育士」という名称に統一され、この名称変更が男性保育士の増加に繋がったようである。

近年は、個人の適性に対する考え方が、昔からの「〇〇だから××でなければならない」という思い込みから解放されて「個人の選択」が尊重されるようになってきた。そして、多くの職場においても男女の垣根が低くなってきた。

この平成11年の「保育士」という名称からくる抵抗感の減少と、さらにTVドラマなどが男性保育士を登場させて好印象を与えたことや、注目を浴びたことにより認知度が上がったことも、男性保育士の増加に貢献した理由の1つと言える。また、中学校での体験学習の場として、保育所に向いた経験から、男性保育士への希望者がより増加したのではないだろうか。

保育の養成校に入学することは、9割以上が自らの希望であった。父親の勧めで養成校に入学したのは、1年女子42人中1人、2年男子7人中2人いた。母親の勧めで保育の養成校に入学したのは、1年男子11人中1人、女子42人中1人、2年生では男子7人中2人であった。全体では86人中の4人が母親の勧めで入学している。親の勧めが7人、その他が3人で10名が自分の意思

ではなく養成校に入学している。少数ではあるが、必ずしも本人の希望する納得のいく進路とは言えない。あるいは自分の人生ということを深く考えもせずに、保育養成校に入っている。

オープンキャンパスに参加してくるのは学生だけではなく、両親同伴が年々多くみられるようになってきた。ある親の発言だが、わが子が性格的に優しいという理由から、「厳しい大人の世界ではなく、子どもと接する仕事の方がまだ楽だから。保育者は子どもと一緒に楽しく遊んでおれば良いのだから。」などといった安易な思い込みをされている事がある。世間や親の認知している保育士という仕事内容は、表面的なイメージに因るものか、現実の保育現場とかなりのギャップの大きさには、今更ながらに驚かされることがある。

保育者になる予定があるか否かの設問では、「それ以外はない」と答えたのが1年生は男女合わせて30.3%、「できれば」が30.2%であった。2年生になると「それ以外はない」が5.8%に「できれば」が32.6%へと激減していた。自分の希望通りの進路ではあったが、保育養成校に入学してみて、表面的なイメージと現実の保育というものや、自分の適性とのギャップを感じたのであろう。現在の日本では、人生というものをあまり深く考えることもなく生きてゆくことが可能である。しかし養成校に入学したことで、学習内容の多さ、世間の一般常識と今の自分の有りようの差から、モチベーションの低下と、なかにはドロップアウトしてしまう学生すら見受けられる。

保育者になることは、自分にとって、どんな意味があるのかという設問から、「使命・天職」と答えたのが1年生では17.2%、2年生では9.3%であった。「楽しそうな仕事」と答えたのが1年生では24.4%、2年生では15.2%であった。保育者とは、楽しいだけでは済まない世界が見えだしたのであろうか。なかには、2年生女子が保育者とは「命を預かる大変な仕事」と記入していた。保育者という専門職への自覚が読み取れる回答であった。

他に、1年女子では「子どもたちを支えたい。」2年男子では「国家資格将来安定・子どもと触れ合える・夢」、2年女子では「やりがいを感じられそう」といった前向きな思いが伝わる記入もあった。

保育者として最も大切な事は何かという設問では、全体の58.2%が「人間性」として、次いで39.5%の学生が「援助の方法・対応」が大切だとした。『その他』では、1年男子が「こころ」と記していた。

この保育職という仕事は、技術やテクニックだけでは対応しきれないことを理解しているようである。保育者は人間の心に寄り添い、子どもという存在を理解することが大切である。

しかし、保育者となるために何か準備をしているかの設問では、「役に立ちそうな部活」では、1年生3.5%、2年生2.4%であり、部活は将来へ繋ぐ要素ではないと考えているようであった。「スキルアップに習い事」では、1年生の16.3%、2年生の9.3%がピアノ等の習い事をしており、全体では男子学生の4.6%が習い事をしていた。「その他」ではボランティアをしている学生が5人あった。習い事の内容やボランティア活動で学生が何をもって「役に立つ」と考えているのかは、今後の課題としたい。「特に無い」と答えた学生が、1年生ではおよそ4人に1人、2

年生でも6人に1人いた。

これらの結果は、あくまでも数字上の推察で、大学生活が将来的に保育者になるための準備活動をするだけで正しいとは言いきれない部分もある。個人の過去における欲求のリセット期間であったり、人生における他の価値観へのチャレンジ期間であったり、いろいろな可能性に向けて流浪することができるのも大学時代である。

保育者という仕事について、どのように考えているのかの設問では、「未来を担う人を育てる」ことと、全体の87.2%が答えていた。「その他」で1年男子が、保育者とは「多くの人間の人生を支える仕事」と記入した。保育職に誇りを持ち、保育者として経験を重ねて成長をして、人として育って行ってくれることを期待したい。

しかし、現実の『保育所保育指針』にもあるような保育士の仕事内容の認識と、世間一般の認識のズレはまだ根深いものがある。さらに社会の認知度や温度差といった現実問題も厳しいものがある。希望と現実との狭間でゆれる男子学生の問題には特に早急な解決が望まれる。

家庭での子育ては男女両性で行う重要な仕事であるということが浸透しつつある。当然ながら保育の職場にも父性と母性の両方が必要な筈である。父親の育児参加のような男性的な力強さと、男性的な発想とその感性も重要である。人間が人間を育てるという基本のもと、男性保育士の重要性とその立場を社会はもっと気付くべきである。

さらに保育職には、時代のニーズからやってくる保育者に期待される多様な役割がある。近年子どもを取り巻く社会状況や家庭環境は、さまざまな課題を抱えている。男性保育士に期待される職務として、児童福祉施設でのニーズも増大している。保育者とは、父性と母性双方の協力のもと、子どもの幸せを第一に考え、子どもやその保護者を支援してゆく義務がある。

人類誕生から500万年間、縄文時代から明治そして現在へと、我々はモンゴロイドの柔軟性、協調性、受け入れ体質、大らかさなどの本源的気質を持って、次代を担う子ども達の育て方を体現してきた。共同体の中で生まれ、共同体の一員として課題を担っていけるような成長を期待されてきた。「集団の充足共認」という気質を受け継ぎ、その中で生きながらえ人々がお互いに認め合う中で充足を共有してきた。

ところが、現代においては利益優先、観念優先の私権社会における試験制度や官僚制度がはびこっている。観念教育と家庭の密室化による虐待や育児放棄、理由なき殺人など、子ども達の精神と肉体における環境破壊が進行している現状がある。我々は、目の前の欲望に心を奪われて、本来は一番大切な未来を担う存在に、そのしわ寄せをしてしまっている。大人は未来を見据えて「未来を担う人を育てる」ことを念頭に、我々自身が意識を替えてゆくことが必要である。本来の道へと方向修正をすべきである。

現在、具体的には、保育所は地域子育て支援拠点として、「地域との連携や、家庭内の親を育てる保護者支援」といった家庭養育の補完という大役が期待されている。保育士は、もはや子どものみならず、その親の成長をも支援してゆくという大変な専門職なのである。

今回のアンケートに答えてくれた保育者養成校の学生たちが、保育者として、人として成長し育って行くことを願うと共に、その学生たちの人的環境にあたる筆者は、身が引き締まるよう

な感覚を覚える。

6. おわりに

倉橋惣三の著書「幼稚園保育法真諦」に次のように述べている。「生きているものが、われにあるによって一層生きてくれる。しかも、われは常に相手の生活の下に潜み内にかくれて、その意図と努力を表立てない。自らをあらわにしないで、そっと他を生かす。」これは、まさに、子ども自ら主体となって遊びきるという保育士としてもっとも必要な環境構成の考えである。また、「個の成長が集団の成長に関わり、集団における活動が個の成長を促すといった関連性に十分留意して保育することが重要」と保育所保育指針解説書に書かれている。保育における質とは、「生活の下に潜み」、「自らをあらわにしない」という子ども自ら主体となって遊ぶこと、一人ひとりが、よく生きるための援助とは何か常に対応して省察する姿勢ではないか。

今まで保育者になろうと養成校に入学してくる学生は、みな、何よりも子どもが好きで、保育をいやな仕事と思っている学生はいないと感じていた。「保育に魅力はない」と答えた学生には驚かされた。

今回、アンケートを行った養成校（大学）1・2年の保育者になるという意識の希薄さが伺えた。これは人を育てるべき場である家庭環境において、親が学生本人の意思を尊重した進路決定をしたのであろうか、能力や適性が発揮するに相応しい選択であったか否かの問題も潜んでいるのではないか。

養成校教員として保育者の生きがいとは何か、福祉の理念、人を人として育てる援助の心を大切に学生に伝えていきたい。前述の倉橋は「自ら育つものを育たせようとする心、それが育ての心である。」と言っているように『人として』心に寄り添い援助することの大切さを伝え、『人として』時には育て直しの必要も感じつつ学生を育てて行きたい。それが将来、子どもたちへの保育の質の向上に繋がることではないかと考える。

参考・引用文献

- [1] 厚生労働省『保育所保育指針』平成21年4月25日 フレーベル館 1999
- [2] 文部省『幼稚園教育要領解説』平成16年6月15日初版 フレーベル館 1994
- [3] フレーベル（訳）岩崎次男『世界教育学選集 人間の教育1』明治図書 1971
- [4] 青木久子『新保育者論 子どもに生きる』萌文書林 2005
- [5] 小田 豊・芦田 宏 編著 新保育ライブラリ『保育内容 言葉』北大路書房 2009
- [6] 後藤永子『保育者として生きる－保育指導論』スペース新社保育研究室 2005
- [7] 田中まさ子 [編]『新・保育者養成テキスト 保育者論』(株)みらい 2012
- [8] 成田朋子『子どもは成長する、保育者も成長する』あいり出版 2008
- [9] 倉橋惣三「幼稚園保育法真諦」第1篇「保育法真諦」の扉 倉橋惣三選集 第3巻 フレーベル巻 1965
- [10] 倉橋惣三 育ての心 (上) 倉橋惣三選集 第3巻 フレーベル巻 1965
- [11] 青木久子 新保育者論 子どもに生きる 萌文書林 2005

共著ですが、共同研究の性格上抽出不可能である。

受理日 平成25年9月30日